

「負」の遺産

人類の歩んできた歴史は、輝かしいものだけではない。消し去り、封じ込めたいような惨禍の記憶と痕跡。それらを過去からの教訓、警鐘を告げる「負」の遺産として向き合っていくことが、よりよい未来へとつながっていくのではないか。

時の流れにあらがいつづける遺産

竹沢 尚一郎 民博民族文化研究部

悲惨な出来事の記憶

「負」の遺産とはなにか。人類の歴史において生じた、戦争や自然災害、公害などの大規模で不幸な出来事の記憶を今に伝える施設や遺構。それが「負」の遺産であると定義することができる。

そのようなものとしての「負」の遺産は、アウシュヴィッツビルケナウ収容所や広島原爆ドームのように、戦争がもたらした惨劇を今に伝えるものであることもあれば、スマトラ島沖地震や東日本大震災が残した破壊された建物や施設のように、自然の威力とそこで生じた悲劇を思い知らせるものであることもあるだろう。あるいは、有機水銀に汚染された水を垂れ流すことで何万もの水銀中毒被害をもたらした

水俣市のチツソンの百間排水口であるし、毎年のように多くのアフリカ人を積み出したセネガル・ゴレ島のような奴隷貿易の基地であったりもするだろう。

これらの施設や遺構のいくつかは、アウシュヴィッツや原爆ドームやゴレ島がそうであるようにユネスコの世界遺産に登録され、毎年多くの訪問者を受け入れている。それだけでなく、外国人観光客に対するアンケートで広島原爆ドームと平和資料館が一位に挙げられることもあるなど、ぬぐいがたい印象を与える施設なのである。

日本には寺院や施設などの壮麗な建造物が数多くあるにもかかわらず、一見地味な「負」の遺産がそれほど強烈な印象を与えることができず、融解したガラスや黒焦げの弁当箱を目の前にした人間は、そうした出来事が二度と生じてはならないこと、そのためには自分はどうすべきかという思いを強くもたされるだろう。その意味で「負」の遺産とは、さまざまな出来事を時間軸に沿って位置づけることで忘却へと導くのではなく、ひとつの出来事を意識のなかに屹立させ、時間の流れにあらがわねることで、見る者を自己への問いかけへと促すものである。

喚起する力

特徴の第一は、施設を遺産として保存するにあたって多くの議論を喚起したし、今なお喚起しつづけていることである。戦後二〇年間雨ざらしになっていた広島原爆ドームが取り壊されそうになったとき、市民による保存運動によってようやくその保存が決定されたのだが、家族や友人を原爆で失った市民のあいだには保存に反対する声が多かったのも事実である。東日本大震災の遺構についても同じであり、多くの犠牲者を出した石巻市の旧大川小学校や岩手県大槌町の旧役場などは保存か解体かで議論がわかれ、いままなお結論が出ていない。また、原爆で亡くなった犠牲者の五〇〇人に一人は朝鮮半島出身者であったとされるが、彼らを慰霊する韓国人原爆犠牲者慰霊碑が平和公園の外に置かれているなどの問題は解決を見ていないのである。

特徴の第二は、人類史のなかの「コマ」として過去の出来事を記憶のなかに位置づける他の遺産と異なり、強い喚起力や不安を引き起こす力をもっているがゆえに、記憶のなかに安置させることを許さない点である。アウシュヴィッツに陳列されているユダヤ人から切り取った膨大な量の髪の毛や、広島資料館におかれた熱で

保存か解体かをめぐって多くの議論が生じている岩手県大槌町旧役場



アウシュヴィッツ=ビルケナウには、多くの死をもたらしたガス室の跡が残されている



アウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容所へと多くの収容者を運んだ鉄道引き込み線

融解したガラスや黒焦げの弁当箱を目の前にした人間は、そうした出来事が二度と生じてはならないこと、そのためには自分はどうすべきかという思いを強くもたされるだろう。その意味で「負」の遺産とは、さまざまな出来事を時間軸に沿って位置づけることで忘却へと導くのではなく、ひとつの出来事を意識のなかに屹立させ、時間の流れにあらがわねることで、見る者を自己への問いかけへと促すものである。

広島原爆ドームを訪れたオバマ大統領が、核ミサイルの発射装置を携えていたと一部に報道されているように、世界は矛盾に満ち、悲惨は消えることがない。それだからこそ、「負」の遺産はわたしたちに警告と危険を告げるものとしてそこに存在しつづけるのだろう。



パリのショアー記念館には、収容所から運んできた灰を取めるためのダビデの星をかたどった大きな石が安置されている(ホロコーストの犠牲者には骨が残されていないため)

水俣病資料館の展示リニューアル

ひらいきよのすけ
平井京之介 民博 民族社会研究部

展示場内部



今年、水俣病が公式確認されてから六〇年になる。これにあわせて、熊本県水俣市にある水俣市立水俣病資料館が展示をリニューアルさせた。設立から二〇数年を経て、はじめての全面的な改定である。

リニューアルの前と後

わたしはこれまで、この資料館の展示をさまざまな角度から批判してきた。水俣病の「科学的」「専門的」な知識を提供することにこだわり、来館者の半数以上を占める子どもたちに伝わる内容になっていない。被害者の経験や記憶が無視されている。行政は被害の拡大に責任があるはずだが、裁判の確定判決だけを提示して、自らは反省を示していない。水俣病事件全体を過去の出来事として語り、公害の克服や「環境モデル都市水俣」という現在の水俣市が目指すイメージを強調して伝えている、等々だ。

リニューアルを経て、これらの問題の多くは改善された。メインとなる概要展示の解説は小学校高学年でもわかるくらい平易になった。人びとの以前の暮らし、被害に遭って困窮する姿、受けた差別や偏見、償いを求める運動など、被害者の経験や記憶に焦点を当てる新コーナーが展示のかなりの部分を占めている。また、被害者が語りかける映像や体験コーナーは、被害の



感覚障害の体験コーナー

苦しみを自分のこととして考えるように来館者に促している。元気だったときの犠牲者の写真を並べた「永遠の記憶」と題する半円形のコーナーは、慰霊や追悼ができる空間を形作っている。全体として、いまだ行政の見解や方針が展示の基調になってはいるが、大人向けの詳細解説では、一部それとは異なる少数意見も紹介されている。

展示を通じた対話

じつは今回の展示リニューアルには、わたしも一部かかわった。基本設計の段階で、熊本県や水俣市の職員、被害者、支援者とともに、専

門家会議のメンバーに加えてもらったのだ。議論が進んでいくなかで、水俣病を伝えることの難しさを改めて痛感した。水俣病の定義、得られる教訓、行政の責任等々について、資料館の運営主体である行政と、被害者や支援者のあいだに、埋めようのない認識の溝が存在することが明らかになったのだ。おそらくこの溝は会議のメンバーだけのものではなく、地域の人びとのあいだに広く存在する溝なのだろう。それでも二年ものあいだ、立場の異なる人び

とが定期的に集まり水俣病について熱い議論を交わしたことは、相互に対話を進める貴重な機会となった。その成果は展示にも確実に活かされている。実施設計や解説文の作成には参加させてもらえず、わたしの意見が十分に反映されたとは思っていないが、それでもできあがった展示をみて、かなりの達成感があった。少し遠いけれど、ぜひ、新しくなった水俣病資料館をのぞいて欲しい。批判は甘んじて受けたいと思う。

「永遠の記憶」のコーナー



南京を語ることは

南京大屠殺記念館の平和公園

意外に思われるかもしれないが、南京を訪れた日本人は、「大屠殺記念館は思ったより良かった」としばしば口にする。南京大屠殺記念館(侵華日軍南京大屠殺遇难同胞記念館)では、よくメディアで報道されるような日本軍の侵略や残虐行為のみならず、鎮魂のメッセージや平和への祈り、そして戦後の日中友好の取り組みなどに配慮した展示がなされているからである。また、この記念館には展示場とほぼ同じ大きさの面積をもつ平和公園が併設されていることも、日本

ではほとんど知られていないだろう。南京大屠殺記念館は、「愛国」や「抗日」を色濃く反映させた中国国内の他の施設と比べると、よりユニバーサルな価値を志向するミュージアムだといえるかもしれない。

二月三日の焦点化

一方で同記念館は、一九三七年の南京での悲痛な記憶を展示する博物館であるだけでなく、その記憶を「人民の歴史」として表象するナンショナルな性格をもった博物館でもある。その来館

かわせ よしたか
川瀬 由高 首都大学東京大学院博士後期課程



南京大屠殺記念館の平和公園



原爆ドーム(1996年12月にユネスコの世界遺産リストに登録された)

原爆遺構・被爆品とともに「平和」を考える ——ヒロシマの国際化・観光化

原爆遺構と記念施設が文化遺産に

一九九六年二月、旧広島県産業奨励館(原爆ドーム)が、核兵器廃絶と人類の平和を求める誓いのシンボルとしてユネスコの世界遺産一覧に登録された。英語の正式名称は「Hiroshima Peace Memorial」となった。二〇〇六年には、

上：記念館の外観
中：12月13日の日付が刻まれたモニュメント
下：新設された南京利済巷慰安所旧址陳列館



者数は年間八〇〇万にのぼるといえるが、これは負の歴史記憶をめぐるソーシャルメディアの興隆をしのぐのみならず、中国式の愛国主義を鼓舞するいわゆるレッドツーリズムの様相を呈しているともいえる。事実、観光客のなかには中国の国旗を手にしながら参観する者も少なくない。さらに近年、同記念館にはあらたな政治的重要性が付与された。二〇一四年からは、南京陥落日である二月三日を、南京事件における犠牲者(死難者)を弔う国家行事をおこなう日とすることが定められた。さらに二〇一五年二月には、新館として、慰安婦問題を取り上げた施設と、「ファシズムに対する勝利」を主題とする歴史展示施設のふたつがオープンした。かつてダンカン・キヤメロンは、ミュージアムは特定の記憶を固定化させる場としてではなく、

個々人にあらたな問いと思索を投げかける場へと変革すべきだと述べていたが、近年の南京をめぐることばは、その逆の方向へと歩みを押し進めるものであるかのようである。

ローカルな記憶

二〇一四年二月三日、習近平主席が同記念館を訪れた際におこなわれた第一回国家追悼式の模様は全国放送され、筆者の調査村でも話題となった。だがそのとき、筆者とともにテレビを囲んでいた村人から投げかけられたことばのうち、もっとも熱がこもっていたのは、「日本の教科書に記載があるか」といった話題ではなく、ローカルな痛みへの記憶に関するものであった。じつは、この村が位置するのは高淳という南京市の最南端の行政区であるが、ここは日本軍の

「南京への道」の行軍ルートにあたっており、同村もまた、「二月三日」に先立つこと二週間ほど前に、放火・殺人の被害をうけていたのであった。

先日、調査村を二か月ぶりに再訪した折、当時の被害の様子をもっとも詳しく教えてくれた方の訃報を聞き、愕然とした。高齢化が進み、庶民がうけた苦痛とその記憶が失われてしまう前に、彼から、そして村人からの友情に報いたい。一人の日本人人類学者として、高淳の地元の人びと一人ひとりのことばにじっくりと耳を傾けていきたいとの思いを強くした。



最寄り駅での国旗販売の様子

楊小平 広島大学大学院外国人客員研究員

広島平和記念都市建設法に基づいて一九五五年に開館した広島平和記念資料館の西館(現在「本館」)が、第二次世界大戦後の建築物としては最初の重要文化財に指定された。この年一月に、わたしは中国人留学生として広島大学に入り、間もなくして原爆ドームと広島平和記念資料館を訪ねた。広島平和記念公園の和やかな雰囲気と被爆品の凄まじい惨状のあいだに、わたしは「いま」と「かこ」が混じり合う世界に吸い込まれ、「負」の遺産をとおして「原爆」と「平和」を問い始めた。

「負」の遺産と「平和」のあいだ

一九四五年八月六日、原子爆弾の投下により、多くの死傷者とともに広島市の街は廃墟となり、軍都としての広島はその歴史を閉じることとなる。原爆ドームと広島平和記念資料館の本館に展示されている弁当箱や下駄などの被爆品を見ることをとおして、わたしは死や生きる苦しみ、悲しみ等の原爆体験の「負」の意味を体感することとなった。そして同時に、かつて学んだ日本から爆撃を受けた重慶の惨状も脳裏に浮んだ。広島市の「負」の遺産への旅は、歴史を知るとい



広島平和記念公園。被爆70年にあたる2015年の5月に開催されたフラワーフェスティバルでは、花で「70」の数字が描かれた

う行為のなか、ヒロシマとの出会いと自らの平和への思いを同時に進行させることなのである。広島平和記念公園は、「平和記念都市建設法」(一九四九年)に基づいて平和記念都市の象徴として整備されていった。そのなかで、原爆遺構や被爆品が「生き証人」となり、「広島悲劇」が人類全体におよぶうる危機としてとらえられ、「核廃絶と恒久平和」の追求が世界へと広がった。原爆と平和へ関心をもって、広島は国内外を問わず多くの訪問者を集めている。

「平和」を考える場

世界最大の旅行口コミサイト、トリップアドバイザーにより、広島平和記念資料館は二〇一二年、二〇一三年と二年連続で外国人に人気の日本の観光スポット一位に、二〇一四年、二〇一



去から受け継ぐ記憶は、必ずしも輝かしいものばかりではないということが刷り込まれている。戦争や災害の跡といった人類の悲しみの記憶をめぐる旅を、欧米では一般に「ダークツーリズム (dark tourism)」とよんでいる。この概念は二〇世紀末にイギリスのJ・レノンとM・フォーレーによって提唱され、瞬間に世界中に広がった。アウシュヴィッツは典型的なダークツーリズムポイントであるが、ノルマンディー上陸作戦にまつわる地域やアフリカの奴隷貿易の拠点なども含まれ、そのウイングは広がっている。つまり、西洋社会では歴史の影の記憶を将来にわたって受け継ぎ、教訓として大切に

光あるところに影あり
翻って、我が国の現状を見ると、ダークツーリズムの対象となるべき場所は数多くあるものの、日本社会は長いこと悲しみの観点から地域を掘り下げてこなかった。例えば、昨年の世界遺産登録に際し、韓国から「強制労働」に触れていないと物議をかもした三井三池炭鉱や軍艦島(端島)に関して、日本側からは輝かしい開発のみに焦点をあてた栄光の歴史ばかりが語られていた。

しかし、あらゆる事象には、必ず光と影の両面がある。明治日本の近代化は、殖産興業政策の下、華々しい進展を遂げたが、その一方で足尾銅山の鉱毒問題をはじめとする社会の歪みも顕在化していった。ダークツーリズムという旅の経験は、単に地域のマイナス面をあげつらうのではなく、地域を光と影の両面から深くとらえ直すという営為にはかならない。そして、我々はダークツーリズムを通じて、過去の過ちから学び、未来への決意をあらたにしていく。単に書物だけではなく、歩きながら身を現場において考えるとき、そこには身体性に根ざした実感を獲得することができる。これだけインターネットが張りめぐらされた高度情報化社会においても、現場に身をおくことは絶対的な価値がある。原爆ドームの前では誰もが厳粛な気持ちに



五年には同一位に選ばれた。実際、一九四七年に「原爆十景」が選定され、広島を観光都市とする目標が掲げられて以来、一九七〇年代の終わりごろから平和記念資料館への修学旅行が急増した。現在、年間訪問者は一〇〇万人を超え、そのなかで外国人が二〇万人以上を占める。訪問者からは「改めて平和の大事さを学んだ」「核廃絶への力になりたい」との共感の声、または「被爆者のケロイドをみて、心が痛くなったが、日本の侵略戦争によって亡くなった人びとへの哀悼が見当たらなかったのが残念」等々の意見が聞かれるが、「負」の遺産としての被爆遺構・

被爆品が、人びとに「平和」を考える場を与えていることには間違いがない。
五月二十七日、オバマ米大統領が歴代大統領として初めて広島を訪問し、広島平和記念資料館を見学、広島原爆死没者慰霊碑前で演説をおこなった。慰霊碑前で被爆者と抱擁する写真が大いに報道された。このことは、広島のもつ政治的な意味を示すと同時に、改めて時代とともに原爆遺構や被爆品等の存立の意義をあらわしている。原爆遺構・被爆品とともに、核兵器への警鐘にとどまらず、戦争への反省、和解、また「平和」を考えることもまた可能なのである。

ダークツーリズムという旅

井出 明 いであきら 追手門学院大学准教授

悲しみの記憶をめぐる旅

編集部からは「『負』の遺産を旅するというテーマでお願いします」とご依頼をいただいたが、じつはこの「負」の遺産、という概念は非常に難しい問題を含んでいる。「遺産」といった場合、日本語ではなにか親から財産を受け継ぐように感じられるが、当然のことながら親が債務を残す可能性もあるわけで

必ずしも相続がプラスになるわけではない。そしてこれは、文化の承継にも当てはまる。

例えば、ヨーロッパの教会には、キリストの誕生と死を描いた彫像や絵画が置かれているし、教会芸術のテーマはそもそも「天国と地獄」や「天使と悪魔」といった二元論的世界が採られることが多い。キリスト教社会では、子どものころからこうした文明観に慣れ親しむため、過



アウシュヴィッツ収容所の入り口

なるし、そこには写真集やインターネットでホームページを見るだけでは得られない魂への訴求がある。悲しみの記憶のたどり方は、文学なり芸術なり、さまざまなアプローチがあるであろうが、体を動かしながら現地でモノを考えるという方法はダークツーリズムならではの特徴であり、これは机上の学問とはまた異なる価値をもつ。みなさんも、悲しみの記憶を旅しつつ、多面的な考察力を培う楽しさを味わってみてはいかがでしょうか。

三井三池炭鉱の万田坑

